よみがえるか「飛鳥美人」

高松塚古墳 解体へ

緊張… 失敗許されず

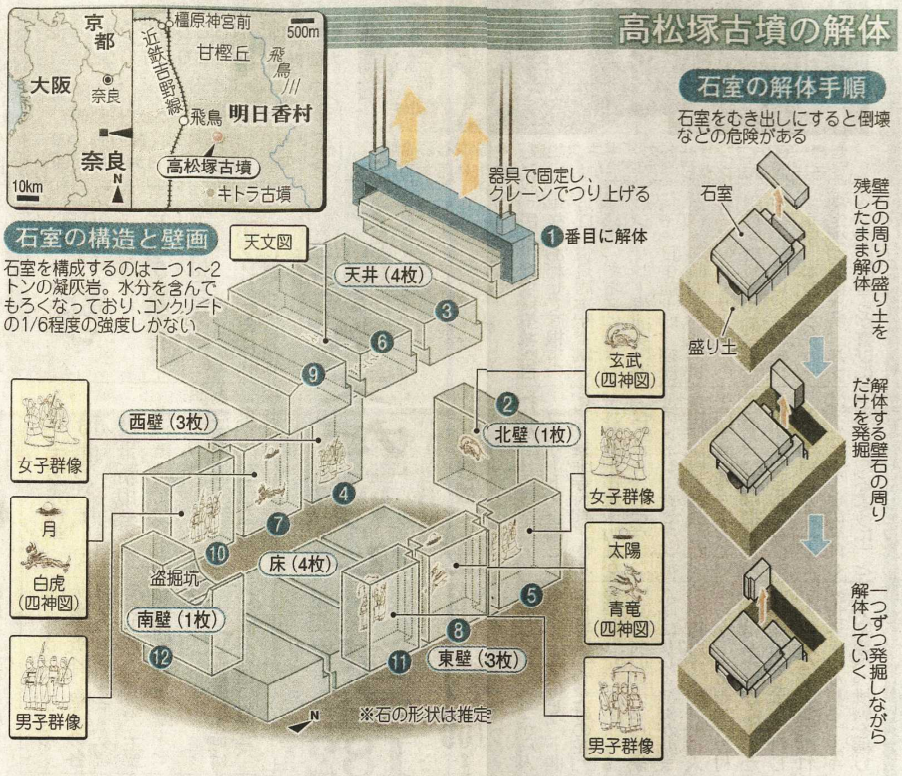
奈良県明日香村の高松塚古墳（七世紀末―八世紀初め）で、国宝壁画を修復、保存するため、四月三日から石室の解体が始まる。一九七二年三月二十一日に壁画を発見して三十五年。「飛鳥美人」はカビで黒ずみ、救出を待つ。国内で例のない作業に失敗は許されず、担当者は慎重に準備を進める。

高松塚は昨年十月から墳丘を発掘。石室の天井石がすっかり現れ、予想以上に状態が悪いことが明らかになった。八枚ある壁石は厚さにばらつきがあった。石室は過去の地震などで傾き、四枚の天井石は西側が最大約十㌢下がっていた。「石室を裸にすると、立っていられるか不安な状態」と発掘を担当した奈良文化財研究所の松村恵司室長。文化庁は当初、石室をすべて掘り出し、解体にかかる計画だったが、壁石周りの盛り土は残し、一枚分ずつ発掘して石を外すよう作業計画を変更した。

天井石は、四枚とも亀裂が入っていることが判明。発掘で新たに見つかった亀裂は長いものは五十㌢を超え、複雑に枝分かれしていた。天井石の厚さは北端は約四十五㌢、残りは約六十㌢で、わずかな振動で欠け落ちる恐れがあり、担当者の工夫が成否の鍵を握る。予定される作業手順はこうだ。まず北端の天井石をつり上げる。壁石が倒れないよう、半分ほどの高さに盛り土を残した上で、金属板で壁石を支える。つり上げるコの字形の器具も、石にかかる力を分散させるため工夫。いくつか組み合わせ、特に危険とみられる石は四方向から挟む。器具がやんわりつかんでは残し、一枚分ずつ発掘して石を外すよう作業計画を変更した。

天井石は、四枚とも亀裂が入っていることが判明。発掘で新たに見つかった亀裂は長いものは五十㌢を超え、複雑に枝分かれしていた。天井石の厚さは北端は約四十五㌢、残りは約六十㌢で、わずかな振動で欠け落ちる恐れがあり、担当者の工夫が成否の鍵を握る。予定される作業手順はこうだ。まず北端の天井石をつり上げる。壁石が倒れないよう、半分ほどの高さに盛り土を残した上で、金属板で壁石を支える。つり上げるコの字形の器具も、石にかかる力を分散させるため工夫。いくつか組み合わせ、特に危険とみられる石は四方向から挟む。器具がやんわりつかんだら、四神図「玄武」がある北壁。北側だけ発掘し、つり上げて運び出す。そして二枚目の天井石、女子群像の描かれた東西の壁石…。作業は北から南へ進むが、石一つあたり準備から搬出まで四日ほど必要。これに盛り土の発掘作業が加わるため、四月三日にスタートし約一カ月と見込まれた作業は、一カ月ほど延び七月までかかる見通し。壁石の損傷などが見つかれば、さらに長引く可能性もある。

解体を指揮する奈良文化財研究所の肥塚隆保室長は「石材を一つ外すたびバランスが微妙に変わり、不安定さが増す。すべて運び出すまで一瞬とみられる石は四方向から挟も気が抜けない」と話す。



有効な修理法を示せ

神戸大教授 百橋明穂氏に聞く

文化庁の恒久保存対策検討会委員を務める百橋明穂神戸大教授（美術史）に高松塚壁画の魅力や意義、解体に対する考えを聞いた。

―壁画から分かることは。

「四神図、天文図という当時の中国や朝鮮半島に共通の画題を描き、古墳時代終末期に、日本が東アジア共通の文化圏に参入したことがわかる。それ以前は鏡などモノは入って来たが、文化的交流とは呼べなかった」

―壁画の魅力は。

「男女の群像は中国のモデルではなく、飛鳥にいた日本人の姿を描いている。似ているとされる唐の永泰公主墓の壁画とも髪や服装、顔つきが違う。本格的に日本の世俗の人を描いたいわば日本初の風俗画。を輸入できる集団がいたと思う」

―被葬者は。

「諸説あるが、近くの天今日まで続く日本画の基礎がここにある」

―描いたのは誰か。

「渡来人の子孫で、高度な技術を受け継ぎ、中国や朝鮮半島にパイプを持ち、当時の最先端のデザイン、顔料様式に忠実で古いようだ。キトラはやや崩した描き方。高松塚は輸入されたばかりの技法や構図法を懸命に勉強したのだろう」

―解体が始まる。

「問題はカビだけではない。しっくいもかさかさで全体につやが失われている。過去の千三百年は、地震による亀裂があっても、石室の環境は安定していた。この三十数年で何度も人が入った影響が大きい。文化庁は解体が安全で有効というが、どんな修理をするか示していない。保存対策検討会で何回質問しても『これから考えます』。本当は同時進行でなければいけない」

高松塚の経過と見通し

1972年3月	◇極彩色の壁画発見
76-89	◇保存修理
2001・2	◇防護服を着ず石室入り口で作業
3	◇石室入り口や墳丘にカビが大量発生
02・1	◇文化庁担当者が壁画損傷（公表せず）
3	◇損傷部分を補修（公表せず）
04・6	◇文化庁が恒久保存対策検討会設置
05・6	◇検討会が石室解体を正式決定
9	◇白虎図にカビ確認
06・2	◇女子群像の顔に黒いカビ確認
4	◇02年の壁画損傷が発覚し文化庁が調査委員会設置
5	◇女子群像に新たな黒いカビ確認
6	◇調査委が報告書、文化庁の隠ぺい体質批判
10	◇墳丘の発掘調査開始
07・1	◇墳丘を包む覆屋完成
3	◇天井石が築造以来初めて露出、南海地震の影響とみられる亀裂などが見つかる
4	◇石室の解体作業スタート（予定）
4-6	◇天井石と壁石取り出し（予定）
7	◇床石取り出し、石室解体終了（予定）

"人災"劣化招く

高松塚古墳は発掘調査で墳丘や石室の状態が詳しく分かり、壁画の劣化につながった要因が明らかになってきた。

「予想外の状況。墳丘がここまでズタズタだったとは」。昨年十月、発掘が始まってすぐ奈良文化財研究所の松村恵司室長は驚いた。墳丘を一・五㍍掘り下げ、幅三〇㌢の地割れが見つかった。過去の南海地震の影響とみられ、縦横に走り石室まで到達していた。

天井石はひび割れ、石の間に塗ったしっくいもすき間だらけ。松村室長は「水や虫の通り道になり、カビが生える環境をつくった。最初に分かっていれば保存方法は違っただろう」と指摘する。

壁画を守るはずの保存施設も欠陥があった。

文化庁は一九九〇年から欠陥を認識していたのに放置。二〇〇一年によみがえりうやく修理したが、カビ対策をせず、石室でカビが大発生した。

恒久保存対策検討会委員の松田真一・奈良県立橿原考古学研究所副所長は「発見時の壁画は見事だったのだから、それ以前からある地割れは決定的な影響を与えていない。文化庁の管理の不備が、取り返しのつかない被害を招いたことが裏付けられた」とみる。"人災"といえる劣化の原因を文化庁がどこまで究明し、今後の文化財行政に生かしていくか、姿勢が問われている。

1972年―㊤、飛鳥保存財団高松塚壁画館提供―と2006年に撮影された高松塚古墳石室の西壁に描かれた女子群像（奈良文化財研究所提供）

「盗掘坑を少し拡げて中をのぞくと、西壁に何か色のあることがかすかに見えた。そこへちょうど陽光がさしこんで、少し明るくなる。見ると青い服に茶色の腰紐（ひも）をつけた人物が画かれていた」

高松塚壁画発見の瞬間を、故網干善教関西大名誉教授は発掘日誌に書き留めている。

「飛鳥美人」と称される女子群像など国内初の極彩色壁画に列島が沸いてから35年。描線が薄れ、カビで黒ずむ無残な姿に変わり果てた壁画。当時の関係者は「半生見続けた高松塚が解体されるなんて想像すらしなかった」と嘆き、石室解体に注目する。

高松塚は壁画発見の翌月から文化庁が管理。

色あせた極彩色

古墳は特別史跡、壁画は国宝に指定した。石室を非公開とし、現地に保存施設を建設。壁画の修理終了後は担当者が年1回、石室の定期点検に入るだけになった。

誰もが万全に管理されていると疑わなかった。しかし2001年、防護服を着ないまま保存施設を修理。直後に大量のカビが発生し、02年には壁画を損傷する事故。文化庁はいずれも公表しなかった。石室解体が決まってからも女子群像の顔など絵の主要部分に黒いカビが生えるなど、急速な劣化を食い止めることができなかった。

発見に立ち会った飛鳥古京顕彰会の上田俊和さん（66）は「残念だが、35年前の美しさを取り戻すのは無理だろう。せめてこれ以上は劣化させず、後世に残してほしい」と話している。